

# 中級レポート授業における現状と 課題についての調査報告

— 留学生の日本語レポートの課題を通じて見えること —

## Current Learner Problems and Challenges in an Intermediate Level Writing Course: A Study of Chinese Learners' Japanese Written Assignments

長谷川 孝子  
HASEGAWA Takako

### 〔要旨〕

本調査報告は、日本の大学レベルの留学生向け中級レポートクラスを調査したものである。調査協力者は17名で、全員中国出身の同じプログラムで学ぶ大学院生である。1学期中の5回のレポート課題から、学習到達状況と学生が抱える問題点を検討した。授業での観察や学習者アンケートから分かる学習者状況からも考察を行った。全体に共通する問題点は日本語理解と引用方法の未熟さに多く見られた。効果的な授業のためには、学習者状況を注意深く観察し、指導内容を修整できるようにすること、そして到達目標を意識させて授業内容を理解できるような十分な時間が必要だと考えられる。

### 〔Abstract〕

This paper investigates a college intermediate level writing course for international students. Participants are 17 Chinese graduate students. Problems in learners' assignments during a semester are examined. Learners' contexts extracted from class observation and questionnaires are also considered. Problems for learners are found in Japanese language and citations. Teachers should observe learners' context carefully and revise teaching contents appropriately. It is important to allow students sufficient time to understand the objectives to be achieved.

**Key word:** レポート授業、授業の到達目標、目標達成、学習者状況  
report writing class, objectives in class, achieving objectives, learner context



## 1. はじめに

レポートを書くという作業の過程では、多くの克服しなければいけない要素が挙げられる。日本語力はもちろん、情報収集力、考える力、構成力など、言語以外の能力も強く求められている。カリキュラムには学習目標があり、それを目指して授業が行われるべきだが、実際の授業を振り返ると、目標達成がスムーズに行われることばかりではない。様々な背景の学習者が存在し、目標達成が難しいことも多い。特に日本語力がまだ不十分な中級レベルのレポート授業では、学習目標を達成するための様々な課題が多く存在する。さらに、学習者のおかれている状況やモチベーションなどの個人的状況が重なり、目標達成のためには個別に違った課題を与えることも必要となる。このような複雑な状況の中で、学習目標を達成させるために、実際のレポート授業では具体的に何が優先的に必要なのかを、現場の教師は授業を進めながら考える必要があると言える。授業においては、文字通り「1人1人個別に対応する」ことを意識しつつ、ここでは授業目標を達成させるために、多くの学習者が抱える問題を考えてみたい。

本稿では、1学期間の大学の中級レポート授業で提出された学習者の成果である5回のレポート内容から、学習者はレポート授業で何ができていないか、授業ではどのような点に注意すべきかを教育実践の視点から検討する。

## 2. 調査の概要

### 2.1 調査対象の授業

#### 2.1.1 授業の流れ

調査対象の授業は、筆者が担当した、大学留学生向けの中級前半修了レベルのレポートクラスである。1学期間週1回90分、計14回の授業で、レポートの構成と引用を学びながら800～1200字程度のレポートを計5回提出する。レポートに関する主な流れは、以下のとおりである。

1. 授業で与えられたテーマについての資料を読む。
2. 資料のテーマに対し、ピアで意見交換をしながら、自分の書きたい内容について決める。
3. 同時に、資料からの情報をレポートにどう引用するかについても授業で確認し、練習も行っていく。
4. レポートで使用できる引用スタイルの確認をし、例文とともに簡単な練習をする。
5. 構成例を参考にしながら、レポートの基幹部分である構成を考える。
6. 授業外活動で構成を用意し、授業のピア活動で学習者同士で構成内容の検討を行う。
7. 授業外活動でレポート作成をする。

#### 2.1.2 課題の内容

テキストの各課で目標の説明があり、授業内で確認をしながら進めた。5回のレポート課題と

目標は以下の通りである。

プレレッスン ・グラフや図、表を読み取ってレポートを書く（基礎編①）

課題1： L1/2「世界の高校生の意識調査」

- ・グラフや図、表を読み取ってレポートを書く（基礎編②）

課題2： L3/4「待機児童問題」

- ・グラフや図、表を読み取ってレポートを書く（構成編①）
- ・引用と自分の意見を明確に示す。 ・引用の仕方（直接引用・間接引用）
- ・長文の直接引用の仕方 ・参考文献を書く

課題3： L5/6「アジアバロメーター調査」

- ・グラフや図、表を読み取ってレポートを書く（まとめ）・正しい引用の仕方を覚える（①）
- ・グラフと本文から、説明と引用に使う部分を考える。
- ・引用部分と意見を明確にし、レポートとして仕上げる。
- ・引用・参考に使われる基本引用スタイル（直接引用・間接引用）
- ・長文の直接引用。 ・間接引用の際の要約練習。 ・参考文献の書き方

課題4： L7/8「メディア・リテラシー」

- ・正しい引用の仕方を覚える（② レポート論文作成）
- ・具体的な事例や専門家の意見を引用しながら、意見を述べる。
- ・課題にあった資料を探す。 ・引用をしながら自分の意見と引用部分を明確に書く。
- ・資料の理解と資料内容を説明。

課題5： L9/10「裁判員制度」 ・まとめ①②

- ・資料から引用部分を考える。

### 2.1.3 テキストで紹介されている引用スタイル

授業では、資料から引用する際の引用スタイルとして主に以下8つを挙げている。

- ① \_\_\_\_\_（発行年、頁）によると、「\_\_\_\_\_」という。／ということである。
- ② \_\_\_\_\_（発行年、頁）は、「\_\_\_\_\_」と述べている。
- ③ 著者名（発行年）によると、\_\_\_\_\_ということだ／ということである。
- ④ 著者名（発行年）は（著書名）の中で\_\_\_\_\_と言っている／述べている／書いている。  
\_\_\_\_\_において \_\_\_\_\_ と説明している／指摘している  
\_\_\_\_\_ 言明している／主張している など
- ⑤ \_\_\_\_\_（著者名 発行年）。
- ⑥ 著者名（発行年、頁）は、「\_\_\_\_\_」と述べている。例として、\_\_\_\_\_ことを挙げている。
- ⑦ \_\_\_\_\_とはどのようなものだろうか。  
\_\_\_\_\_によると、\_\_\_\_\_ということである。\_\_\_\_\_が述べているように、\_\_\_\_\_。

⑧ \_\_\_\_について考えてみたい。\_\_\_\_によれば\_\_\_\_ということである。

これは、\_\_\_\_ことを意味する。このことから、\_\_\_\_と思われる。

## 2.2 調査協力者

コース終了後、調査に関して説明を行い、協力を募った。調査協力者は、調査に関する説明後に自発的に同意書の提出があった学習者17名である。17名は同じプログラムで学ぶ大学院生ですべて中国出身者である。日本語学習歴は1年半から4年、日本語能力試験にほとんどの学習者が合格していて、17名中N1保持者が13名、N2が2名である（不明2名）。

## 2.3 データと分析方法

5回のレポート課題で何が問題となっているか、学習者状況の詳細も検討しながら分析を行う。本調査で扱ったデータは、(1) 授業開始時のアンケート、(2) 授業時の学習者についての観察メモ、(3) 学習者が書いた5回のレポート、(4) 授業終了時のアンケートである。これらを用いて5回のレポート課題に対し分析を行う。

分析は二段階に分けて行う。まず、第一段階として、クラス全体に対する2回のアンケートから、学習者の授業に対するモチベーション、レポートの経験、コース終了後の振り返りなどの学習者状況を抽出し考察を行う。第二段階として、クラス全体と同じ問題点を多く含む学習者C、Kに絞って考察する。まず、C、Kの詳しい学習者状況を考察する。次に、到達目標の大部分を占め、混乱の多く見られた引用方法についての詳細を抽出し、達成度の状況を検討する。

## 3. クラス全体と学習者2名の結果と考察

### 3.1. クラス全体のアンケート結果と考察

本調査では、授業開始時と授業終了時にアンケートを行っている。2回のアンケートは学習者の状況を知るために行った。アンケートの質問内容は資料1の通りである。授業開始時のアンケートで「忙しい」「忙しくなると思う」と答えた学習者はアンケート回答者全員の12名である（アンケート未提出5名）。また、授業終了時のアンケートでは、日本語と専門の授業を週合計10コマ以上受講していたことが分かる。日本語または母語などでレポートを書いたことがある学習者は6名、書いたことのない学習者は9名であった（アンケート未提出2名）。

表1は、授業開始時に行ったアンケートのうち、「この授業をとりた理由はありますか。」「授業に対し、期待することは何ですか。（例：～を勉強したい。～ができるようになりたい）」という質問に対する学習者17名中13名の回答を具体的に記述したものである。

表 1 授業開始時のアンケートから

学習者	授業をとる理由	授業への期待
A	修士論文	嫌いという気持ちがなくなるように
B	レポート能力を高めたい	レポートの書き方を学びたい
C	修士論文	レポートの書き方、上手に書けるようになりたい
D	「理由はありません」	修論がかけられるように
E	論文を書く	論文を書く技術を身に付けたい
F	卒論を書けるように	レポートの書き方を勉強したい
H	レポートを書く力をつける	正しい日本語で文章を書く技術を身に付けたい
J	レポートが得意でない	もっと上手に文を作れること
K	能力向上したい	正確な日本語で論理的な考えで書く
L	美しい文章、日本人が理解しやすくして正しい論文を書くため	正しい論文の書き方を勉強したい 修論を書けるようになりたい
N	ない	空欄
O	修士論文（追加のアンケート）	未提出
P	修士論文	構成から勉強したい

学習者 G、I、M、Q の 4 名は未提出のため掲載せず。

表 1 を見ると、書くことに対してあまり積極的でない学習者が多いものの、修士論文を書くために書く技術を向上させたいという具体的な目標を持っている学習者が多いことがうかがえる。

次に、表 2 は授業開始時のアンケートの「苦手なこと、不安なこと」に対する学習者のコメントである。表 2 を見ると、これから始まる授業や将来に関して、何かしらの不安があると書いていた学習者は 7 名と多いことが分かる。不安について「頑張ります」「あまり考えていない」「ない」と答えた学習者は 3 名であった。表 1 からは具体的な目標を持ちモチベーションも高いことがうかがえたが、時間が限られている上に、書くことに対して苦手意識が強い彼らの総合的な状況を考えると、レポートを書く作業がかなり困難なものであったことが推測される。

表 2 授業開始時のアンケートから

学習者	質問：苦手なこと、不安なことがあったら教えてください。
A	書きたいや伝えたいことをスムーズに書くのは苦手です。
B	自らの将来に対して、とても不安です。
C	大学院に入ったばかり授業の難しさを感じました。ちょっと不安になっています。
D	今の専門知識がそんなにがっちりしてない感じで、レポートや課題という書面的なものが書けるかどうか迷っています。
E	研究科の授業と日本語の授業は両立しにくい。
H	頑張ります。
J	あまり考えてないです。
K	文章の構成や言葉遣い等。
L	ないです。
P	各授業では、ほぼ毎週ぐらいレポートを提出することが必要なもので、自分ができるかどうか、ちょっと不安になります。

学習者 G、I、M、Q、O の 5 名は未提出、F、N 無回答のため掲載せず。

## 3.2 学習者2名の結果と考察

次に、学習者2名に絞って、アンケート結果、日本語能力に関する問題点、目標達成度の変化を考察する。達成度に関しては、到達目標の大部分を占め、学習者全体でも混乱が多く見られた引用方法を中心に見ていくこととする。

### 3.2.1 学習者2名のアンケート結果と考察

学習者CとKは3.1. で示したように、書くことへの不安もあるが、修士論文を書く、能力を向上させる、という具体的な目標を持っていて、授業に対しての意欲が見られる。しかし、学習者CとKのアンケートの詳細をさらに見ていくと、授業の到達目標に関しての意識の違いが見えてくる。表3は授業参加度と授業終了時のアンケートの抜粋である。

表3 授業参加度と授業終了時アンケートからの抜粋

学習者	授業参加度	レポートの経験 使用言語	レポートで難しかったこと
C	遅刻6回 30分以上の遅刻1回	あり 日本語と中国語	日本語、 他の授業で時間がない
K	遅刻1回 欠席0回	なし	資料の理解、構成、引用方法

表3を見ると、Cは難しかったこととして「日本語」と答えているが、混乱が多く見られた引用に関しては、難しかったこととして選んでいなかったことが分かる。また、表3の授業参加度から分かるように、授業には毎回参加していたが、遅れることが多かった。これらのことから、授業で繰り返していた到達目標を強く意識していなかった可能性が高いと思われる。

一方、学習者Kは授業中でも集中し、レポートにも目標を理解している様子が表れていた。アルバイトもしていて、専門のレポートもほかの学生と同じように多かったようだが、「せっかく日本に留学しているから」と話していて、かなり意欲的であった。他の学習者より引用方法を理解している様子が見られたが、表3を見ると、難しかったこととして「引用方法」を挙げていることが分かる。これらのことから、Kが授業目標を意識しながら学習を進めていた様子が推測できる。

### 3.2.2 学習者2名の日本語能力に関する問題点

授業終了時のクラス全体に対するアンケートでは「レポートで難しかったこと」として「日本語」を選んでいる学習者が7名いた（回答者15名中）。表3からも分かるように、Cも「日本語」を選んでいる。ここでは、2名の学習者に共通して見られ、クラス全体とも共通している日本語に関する間違いを1～7に挙げる。「C：」は学習者C、「K：」は学習者Kの具体的な間違いである。（ ）内に適切な日本語や表記を示す。

1. 文体「です／ます」の混在  
C：いいのでしょうか。(のだろうか。)  
K：できません。(できない。)
2. 口語の混在  
C：いっぱい(多く)、皆さん(皆)、でも(しかし)  
K：ご協力(協力)、知らない方(人・者)
3. 文末を読点にする間違い  
C：「興味がある、」(。)  
K：「起こっている、」「引き起こす、」(。)
4. 疑問符「？」を入れる間違い  
C：気がするのが?(か。)  
K：ないのだろうか?(。)
5. 「の」が抜ける  
C：するではなく(のではなく)  
K：「～を持っている」である。(のである)
6. 「増加。」「こと。」など、名詞で止める  
C：増加。(増加している。)、対策。(対策をしている。)  
K：88%。(88%である。)、6位。(6位である。)
7. 「～する」の不適切な使用  
C：目指するべきだ。(目指す)  
K：意味をする(がある)

これらを見ると、日本語能力に関して、口語との混乱や初級レベルの間違が見られることから、レポートを書くことに不慣れな様子うかがえる。

### 3.2.3 学習者Cの引用に関する問題点と目標達成度の変化

引用文の使用は2回目のレポートから必要となる。レポート内の引用部分を抜き出し、何が不適切かを【 】内に示す。まず、学習者Cの引用に関する問題点から検討する。

#### レポート2「待機児童問題」

学習者Cの2回目のレポートを見ると、適切な箇所、不適切な箇所が混在しているのが分かる。レポート内の3か所の引用文は以下の通りである。

1. 伊藤(2006、1)によると、「……」という。
2. 【著者名、年、頁がなく、文末不適切】資料によると、「……」と説明する。
3. 【著者名、年がない、「よる」の使い方】ある記事による、……。

1つだけ正確な引用ができていた。テキストを確認すると、練習問題の中に1の引用とほぼ同じ文が例示されている。そして、授業でも何度も例示した引用文であることもあり、理解していたようだ。

### レポート3「アジアバロメーター調査」(日本はどのような社会かについて述べる)

3回目のレポート資料は著者名が分からないため、引用元の新聞名を引用情報としてレポート内に示す必要がある。そして、新聞記事内で引用している教授の調査内容をレポートで引用するようになっている。3回目のレポートでは、前回出来ていた引用ができていないことが分かる。

#### 1. 【引用元情報ではない名前を書いている】

猪口教授からの調査による、「……」というもの。

学習者Cのレポートでは、引用元を示す情報はない。加えて、到達目標である引用の形式も不適切である。「～によると～ということだ」「～は～と述べている」などのテキストに明記されている引用スタイルも使われていないため、自分の意見のような文章が続く。

テキストには引用の練習問題があり、授業でも確認している。しかし、練習問題がすべて「著者名(発行年)によると／は～」と人物を思わせる表示になっていること、直接引用が定着しないうちに次の間接引用の練習が入ったこと、資料内の引用情報を引用するという、複雑な状況であったことなどで混乱が起きた可能性がある。また、引用情報を示す意味もまだ理解できていなかったと思われる。

### レポート4「メディアリテラシー」

ここでの課題は、テキストの資料に加え別の資料を探し、その資料からも引用することであった。学習者Cのレポートでは、いくつかの文献から自身の考えと似た文章を見つけ、それらをほぼそのまま並べた内容になってしまっていた。

#### 【不適切な引用形式と内容】

1. (メディアリテラシー教育の重要性：笹井宏益) 日本のインターネット利用者数は……
2. また、(メディアリテラシー教育の実践事例集の開発 平成28年9月) 子どもたちの現状を見てみると、……
3. (その情報ホント？ネット時代のメディアリテラシーとは2015.9.03) 日本最大の……

まず、引用形式を見ると、記事のタイトル、著者名、掲載年などが上記のように不適切な形で( )の中に記されているのが分かる。今までの引用形式、新しい到達目標である引用の際の表現も全く使用されていない。引用の内容も、引用情報元の10行近くが、そのまま(上記2)、も



しくは、一部の言葉（上記1）や丁寧体の文末を変更した形で（上記3）そのまま記載されている。授業内で指示し、課題内容としても明記してあるのだが、「L7・8の資料からの引用する」という課題もできていなかった。

副田（2017）は、学習者が自分の経験や知識を活用できないテーマの場合にはインターネットで内容面の情報を検索する時間が長いことを述べている。学習者Cは、レポートのテーマである「メディアリテラシー」についての理解に時間がかかった可能性が大きい。加えて、この時の授業内容を考えてみると、テーマと資料の理解、新しい引用スタイル、要約練習、新たな資料を探す、などの多くの内容を理解し定着するまでの時間が十分に取れなかった可能性が大きい。スケジュールがかなり詰まっており、十分な理解ができないままに内容が進んでいったと思われる。この時点で学習者が理解できたと思われるのは、「他の文献からの引用情報を示す」ということだ。Cは1回目のレポートでインターネットサイトの意見をそのままレポートに写して出典を示していなかったことがあったのだが、その際「自分の意見と同じだから問題ないと思った」と言っていた。これに対して、「必ずサイトの情報を書くように」と注意をしたことがある。クラス全体でも何度も確認し個人的にフィードバックを行った点は理解したようであるが、時間がない中で行った多くの内容に関してはレポートに反映されていない。

#### レポート5「裁判員制度」

ここでは、4つすべての引用文に不適切さが確認された。

1. 【「よって」不適切】法務省によって、～とは、～ということである。
2. 【「よって」、文末が不完全】世論調査によって、「……」。
3. 【「さん」、「よって」、文末が不完全】市川美亜子さん（2016）によって、「……」。
4. 【出典なし】～が重要だと思う。

新しい引用スタイルもテキストに例示されているのだが、それらの引用スタイルは使われていない。また、一か所出典を示していない箇所も見られる。しかし、引用スタイル「\_\_\_\_（出版年、頁）によると、『\_\_\_\_』という。／ということである。」を、不完全であるが使おうとしている。引用文は不完全であるが、いくつかの資料の大部分をコピーして、合わせただけという前回見られた状況は改善された。

#### 3.2.4 学習者Kの引用に関する問題点と目標達成度の変化

次に、学習者Kの引用に関する問題点を検討する。学習者Cと同じく、何が不適切かを【 】内に示した。

## レポート2「待機児童問題」

目標になっている直接引用、長文の引用をすべて使っている。

1. 【数字全角、頁、要約の仕方／引用を示す表現】  
伊藤（2016、1）によると、～ 減っていない。  
～ 増加しているという。
2. 【引用なし】政府は～ 2017年度末までの「待機児童ゼロ」を掲げ、  
～ 対策が追いついていない。
3. 【直接引用部分を2字でなく1字下げている】  
伊藤（2016、1）は「隠れ待機児童」について次のように述べている。  
「……」
4. 宮下（2016、16）は育児休業が ～ 「……」と述べている。

多くの学習者に見られた文末のねじれもない。正確に書けている部分が多い。しかし、1とほぼ同じ例、4と全く同じ例がテキストにあり、テキスト例をそのまま写していると思われる。

## レポート3「アジアバロメーター」

ここで引用形式に大きな間違いが見られるようになった。

- 【レポート2で出来ていた「～によると、～」の引用スタイルができていない】
1. 「アジアバロメーター」の世論調査による、～を対象して調査の結果が示されている。
  2. 「アジアバロメーター」世論調査」の資料2「近所付き合い」に満足している人を調査して、……ことが分かる。
  3. 「アジアバロメーター」世論調査」の資料3「外国人の友人がいる」～と回答したのは、～にとどまっている。

参考文献には引用元である新聞記事の情報を書いているのだが、文中に出典を示す情報が全くない。レポートを返却する際、「資料をよく見ながら書いた」とコメントしていた。テキストを見ると、レポート中にそのまま使用できる引用文の例は載っていない。また、授業中に配布した資料は、構成についての資料で、引用方法に関しては扱っていない。構成に関しては論理的な流れになっていて資料を参考にしていることがよくわかったのであるが、引用に意識が向いていなかった可能性がある。また、「よる」と「よると」の正確な理解もできていないようだ。前回は理解していたと思っていた引用形式も、テキストの引用文の例示をそのまま書き写し、正しい引用方法の理解が足りなかったことが推測できる。

## レポート4「メディアリテラシー」(日本はどのような社会かについて述べる)

様々な引用形式を用いているが、まだ多少の間違いが見受けられる。

【「～は～と述べている」という引用スタイルが使えていない】

1. 読売新聞の月野(2002、25)「生活スコープ」ワイド版『テレビ子ども』番組を～ということがある。
2. 月野(2002、25)が述べているように、～
3. (2.に続く文章)具体的には、～という意見があった。
4. 【「～は～と述べている」「～によると、～ということである」が使えていない】  
読売新聞の小林(2014)「うわさ ネット介し伝達速度増す」による、～石油コンビナート火災。～ということがあった。
5. 松田美佐によると、～という(小林、2004)。
6. 【真なし】(5.に続く文章)松田はうわさとの付き合い方について「情報源を確認し、不審な点を検証する力＝メディアリテラシー」が重要であると指摘している。
7. (6.に続く文章)うわさの審議とその影響について常に意識させる教育が必要と述べている。

テキストL7では、上記1.4.の文末にある「～ということがある」ではなく、「～とはどのようなものだろうか。～によると、～ということである。」といった引用スタイルの提示と穴埋めの練習問題を行っている。「ことがある」「ことである」の意味が十分理解できていなかったために、引用スタイルの理解ができずに効果的に使えなかったことが推測される。6.と7.の引用はほぼできているが、テキストの練習問題にある文章と同じであった。L8で提示された新しい引用スタイルと資料は使用されていないが、以前より正しい引用方法に近づいている。

## レポート5「裁判員制度」

最後のレポートでも引き続き引用に混乱が見られる。

1. 【直接引用が突然始まる、文字下げが2字以上】  
～現状と課題はどうなっているのだろうか。考えてみたい。  
「裁判員制度」とは……(法務省、裁判員制度、平成21年)
- 2.. 【数字全角、「」内の情報が一部変更されている】  
読売新聞(2014)によると、「～多数に上る。(引用元:「上るなど、)」～ことがわかった。一方で……抵抗感が強いということである。

【3～5「～によると、～ということである。」の引用スタイルが使えていない】

3. 読売新聞（2014）は全国の世論調査による、裁判員制度をあまり知らない人もいる。
4. 読売新聞（2014）は全国の世論調査による、「裁判についての印象」の調査の結果が示されている。
5. 読売新聞（2014）は全国の世論調査による、「裁判員として参加することに消極的だ」。
6. 【文のねじれ】読売新聞（2014、15）が「裁判員制度」に関する全国世論調査の結果は、「……」という理由を述べている。
7. 【「よる」、「」内の情報】  
読売新聞（2014、15）による、「～アンケートでは95%であった。（引用元：に上っている。）～ことが重要だと述べている。

まず、直接引用の際に「」内の情報を一部変更している間違いが見られた。2. と 7. では、最後の括弧を忘れていた。また、引用元を見ると、文章の「～ということだ」「～と述べている」の前までの3行近くが引用元の情報と同じで2文以上もの長文である。必要な情報を要約した間接引用とするのが適切かと思われるが、そこまで理解できていない可能性が大きい。3. ～5. では、「よると」が「よる」になっている。

### 3.2.5 学習者2名のレポートに関する考察

学習者C、Kのレポート詳細を考察すると、日本語能力に多くの問題が残る状況で、引用を正確に使うことの難しさが表れている。学習者Cは最後まで1つの引用形式がなかなか定着していないことから、テキストの引用スタイルなどの目標を確認していないことが分かる。Kは到達目標である引用スタイルを多く使用し、配布資料までよく確認している状況が考えられるが、このようなKでさえも、すべて間違いなく引用を行うことが難しかった。なぜ引用をするのかという意味は授業で強調したが、学習者個人の意識の中でその理解が十分でなかったと思われる。また、2人とも「～による」「～によると」の正確な使い方の理解ができていないこと、「～によると」、「～という」「～と述べている」などの引用表現の定着が悪かったこと、テキストで段階的に提示される引用スタイルを「使用していないこと」、もしくは「正しく使用できていないこと」という事実から、引用スタイル内の日本語の理解にも問題があり、到達目標のいくつかの引用スタイルを効果的に使えていないと言える。4回目のレポートでは、2人とも以前適切に使用できていた引用形式ができていなかった。授業の状況を考えると、次々課題をこなさなければいけなかったことで、それ以前の学習内容を含めた内容全体を理解するまでの時間が十分になかった可能性が考えられる。日本語で言いたいことを正確に表現する力が弱いという状況に、専攻する専門科目での忙しさも加わり、到達目標と授業内容を確認しながら課題をこなす時間が足りなかったことも推測される。

しかしながら、このような難しい状況の中でも、KがCよりも比較的多くの目標を達成できた理由は「到達目標を意識する」ということにあると思われる。学習者Cは目標である多くの引

用スタイルを使っていないが、学習者 K はなるべくテキストや資料の引用スタイルを参考にし、意識していた。学習者 C は授業中の指示など伝わっていないことがあったが、学習者 K に関しては、授業内で繰り返した点や資料をよく確認してレポートを書いている状況が観察できた。授業終了時のアンケートでも、難しかったことに「引用方法」を選び、意識していたことがうかがえる。テキストや参考資料を確認し、授業内の指示にも注意することで、到達目標にも意識を向けることができたようであった。

#### 4. 今後の授業の方向性

レポートでは多くの問題点が見つかったが、これら問題点から、今後の授業の方向性を Richards (2001) の既存研究に基づいて考えてみたい。Richards (2001) は、効果的なカリキュラムのためには、学習者、教師、教育機関が何を求めているかというニーズ分析と、学習者のモチベーション、教師がどう教えられるかなど、プログラムに影響を与える要素を探すための状況分析が必要であると述べている。そして、この状況を考慮したうえで、具体的な到達目標を考える必要があるという。今回の調査協力者の状況を考えると、修士論文やレポートなどの書き方を学びたいという確固たる目標を持っている。書くことに対しては苦手意識を持っている学生も多いが、目標に向かって前向きな姿勢が理解できる状況である。授業の達成目標を見ると、段階的にレポートを作成するために必要な目標となっていて、学習者の目的と合致する内容だと言える。しかし、彼らの日本語のレベル、レポートを書いた経験などの状況から考えると、目標に到達するためにはさらに詳細な到達目標が必要になることが分かる。

例えば、口語と文語の違いについての理解、日本語表現の正しい理解、要約力、日本語で意見を述べる力、引用をする意味、参考文献を書く意味なども具体的な到達目標とする必要があるだろう。目標達成のために必要な課題に関しても、彼らの日本語レベルと忙しさの両面を考えると、授業内でのピア活動や教師の補助がさらに必要だと考えられる。資料の正確な理解や引用方法の繰り返しの練習にも、理解度の確認をしながら進めたほうが良い。そして、これらの目標を達成するために必要な時間を考慮することも忘れてはいけない。与えられたスケジュールに沿って授業を進めてきたが、振り返ってみると、次々と進めた学習項目は学習者が理解しきれず、結果的にほとんど定着しない状態となってしまうていた。日本語での表現力がなく、レポートを書くことにも不慣れな学習者に必要な時間を考え、現実的な到達目標を選択しなければいけない。さらに、Richards (2001) が述べていることの他に授業実践で重要なことは、到達目標を意識させることである。分かりやすく目標を示す、繰り返し重要性を確認させる、考えさせるなどの活動を行い、目標の重要性を理解させる時間をとり入れることで、授業内容の理解と目標達成に繋がると思われる。

今回の学習者状況の中では、到達目標の中心である 2 例の引用スタイルの定着が悪かったという現状から、本稿 2.1. に示した 8 つの引用スタイルではなく、混乱の見られた以下 4 つに絞っ

て教えるという方向にもっていくことが、個人的な意見であるが望ましかったと思われる。

- ① \_\_\_\_\_ (出版年、頁) によると、「\_\_\_\_\_」ということである。
- ② \_\_\_\_\_ (出版年) によると、\_\_\_\_\_ということである。
- ③ \_\_\_\_\_ (出版年、頁) は、「\_\_\_\_\_」と述べている。
- ④ \_\_\_\_\_ (出版年) は、\_\_\_\_\_と述べている。

これらの引用スタイルをまず確実に定着させるために、「による」「によると」の正確な理解と短文作成を含む練習から始めた方が結果的によかったと言える。そのような日本語理解の基礎的な学習を行った後で、資料の情報と自分の主張との関連付けを考え、レポートの引用部分だけの練習を繰り返し、最後にレポートとして仕上げる段階的な活動が効果的であったと思われる。

Richards (2001) はプログラム進行中も学習者の状況が変化し、初めに予測していなかった状況が明らかになるなどした場合、目標を修整しながらカリキュラムを展開していくことが必要だと述べている。授業実践の際は、学習者状況とその変化を注意深く観察し、学習者にとって複数の到達目標が理解できる十分な時間があるかを確認しながら、指導内容を修整していくことが望ましいと言える。各学習者に必要な活動や課題は何か、それらに必要な時間はどの程度かを考え、学習者にちょうど良い指導内容に修整しながら授業を進める必要がある。

## 5. おわりに

本稿では、大学の中級レポート授業で提出された学習者の5回のレポートから問題点を探り、傾向をまとめてみた。学習者が抱える問題を見てみると、共通点は日本語で苦労していること、引用方法の混乱にあることが明らかになった。学習者2名が抱えた問題点に関しても、日本語自体の問題点が多く見られ、引用方法に関して混乱をしながら学習していく様子が確認された。

学習者状況を注意深く観察して学習者が何を求めているかを探り、そのクラスの学習者に合った指導内容に修整していくことが望ましい授業への方向性だと思われる。レポート授業は達成すべき目標も多く、レポート作成の負担も大きいため、現状は同じ日本語の一コマであっても負担が大きく異なる。専攻している専門授業の負担も考慮しながら、できることならば、学習者に合った目標設定の引き下げを議論して、柔軟に対応する体制が望ましいと言えるだろう。

### 参考文献

- 副田恵理子 (2017) 「レポート作成過程におけるリソース使用の実態調査-韓国人・台湾人学部留学生を対象に——」『2017年度日本語教育学会春季大会』、160-165。
- 中村かおり・近藤裕子・向井留実子 (2016) 「アカデミックライティングにおける引用文の分析と課題」『2016年日本語教育国際研究大会予稿集』
- Richards, J.C. (2001). *Curriculum Development in Language Teaching*. Cambridge, New York: Cambridge University Press.

## 資料 1. 学習者へのアンケート

---

### ① 授業開始時アンケート

1. この授業をとりたい理由がありますか。
2. レポートは 好き／得意／嫌い／苦手 ですか。  
理由
3. この授業で、期待することは何ですか。  
例：～を勉強したい。～ができるようになりたい。
4. 興味があることを教えてください。  
例：まんが、アニメ、空手、ビジネス……
5. 苦手なこと、不安なことがあったら教えてください。
6. 他の授業は忙しいですか。  
例：大学院の授業が忙しい、レポートがたくさんある……

---

### ② 授業終了時アンケート

1. この授業の前に、レポートを書いた経験がありますか。 はい／いいえ
  2. はいの人……何語で書いたことがありますか。
  3. レポートで難しかったことは？  
日本語／資料の理解／構成／引用  
ほかの授業などで時間がない／アルバイトで時間がない  
その他
  4. レポートを書くとき、授業で配った「引用の仕方」を見ながら書きましたか。  
はい／いいえ
  5. 一週間にクラスはどのくらいありますか。 全部で（                      ）コマ
-

